

湯殿は小さな廊下の奥で、熱い濁った湯だった。頭を洗ふ事が出来ない。

好く肥つた奥さんが這入つて来た。

布團の中で僕は腹遣ひになつて、繪葉書に此んな事を書いた。

『私はあなたを一目見て、黒子を忘れて了ひました。そんなに心配しない方が好い。——』

『あなたも強そうですから、丁度好いようです、いやになつたら、いやなら私はあなたの髪の毛を舐める丈で我慢します——』

『強羅 吉澤館内』

姉さんよりあなたの方が強羅だことはたしかですよ——』

横になると地鳴りがする。空気が稀薄な爲か、温泉につかつた爲か、無性に空腹を覺えた。

僕は弟の氣分の好い時に讀ませてくれと、房州から父に出した手紙を、弟は讀んでもう死んでゐるんぢや無かろうかと言ふ氣がした。

觀音經でも讀んで聞かせてやりたいものだ。

何處にも幸福など、言ふものゝ喰つ付いた七三のやうな人生はない。大概の人間が死にたくな